

火星



平成17年4月号

七曜抄 二

山尾玉藻

きさらぎの日の当りゐる捕鯨の図

夜の梅をかいくぐりたる髪膚なり

うすらひに風の見えゐる紫野

牛小屋の裏なる春の出水川

閑伽桶に名前いろいろ地虫出づ
豊屋が膝を払へば桃ひらく
媼らのリュック負ひ来し甘茶寺
春の雨上がりし馬の匂ひなり
落椿よりはじまれる大千潟
をみなごの足のももいろ望潮

太白星

柳生千枝子

浄闇を鐘の一打のひろがり来
オリオンのまだ見えてをり初詣
涛音の沖より今年来つつあり
新年の涛寄せてくる限りなく
煙草に火点けて今年の顔となる
正月やテリヤに赤いちやんちゃんこ
旧友を喪ひしこと去年のこと

杉浦典子

初日差しぬる腕の数餅の数
齒の先につめたき音のちよろぎかな

雪起し大王松の響きけり
カーテンをはづし枯山近くせり
大寒の着物平らに重ねおく
牡蠣舟に歩幅大きく移りたる
咳込めば黒々と櫂櫂かな

浜口高子

灯の入りて水音となる川普請
湯上がりの赤子渡さる冬桜
浪音にどれも曲れる干大根
鉄橋の音に痩せゆく干大根
掛大根比叡の嶺と並びけり
葉牡丹のちぢれつばなし去年今年
寒林に昆虫館の灯の入りし

火星作品 山尾玉藻選

正月競馬葦毛が好きで了りけり
次の間に盆梅のあるけはひかな
盆梅の四、五鉢ありてぬくもらず
盆梅の胴より湖のひろごりぬ
冬の鹿呼びて鹿寄せ去りにけり
背の高き女礼者でありにけり
獅子舞の腕の文を舞ひをさむ
鶴橋に赤き月あり厄落
大寒の暈に嬰のものあるふれ
寒雀見てゐて昼になりにけり
お降りと思ひし音のすぐ止みぬ
水の上がものをの絮とぶ淑気かな
海を見てをれば元日暮れにけり

神戸 深澤 鱻
大和郡山 城 孝子
明石 戸栗 末廣

日の暮れにちよつと覗きぬ初鏡
麦踏みのおきどき影を正したる
初鶏の小学校の横通る
さつきまで伊吹見えぬし猫柳
猪鍋のかたはらにある朱印帳
雪ぐれや伊吹明りの舩ひ舟
七種の真昼の風の稲荷山
小岬を剣先と呼ぶ冬景色
牡蠣舟に夜ふかぶかとかぶさりぬ
丹田に太棹ひびく初芝居
六曲の屏風の裏の寒かりし
枯山を鞆なます風あり初不動
臘梅を行つたり来たり喪の使ひ
寒晴の立ち塞ぐ波詣でけり
絵襖のぴしやりと閉めてずれにけり
大広間海のしぐれて来たるなり
寒九郎と釣瓶引き合ふ音なりし

八幡 大山 文子

藤井寺 戸田 春月

兵庫 田中 英子

選のあとに

山尾 玉藻

次の間に盆梅のあるけはひかな 深澤 鱧

〈盆梅の胴より湖のひろごりぬ〉があり、湖北長浜の盆梅展での詠であろうことが解る。「胴より」に続く「湖のひろごりぬ」に飛躍があり、広がっていて秀逸である。掲句の場合盆梅展の作品と取ると味が薄くなる。場所設定自体は盆梅展会場である慶雲閣などがよく似合う。二、三鉢の古い盆梅が置かれている玄関から部屋へ通されたが、「次の間」はこの家でも一等の部屋らしい。その部屋には玄関で見た盆梅よりも立派な盆梅がある気配がする。そう言えば梅の香もしてくる。繊細で微妙なところを捉えた秀作である。

背の高き女礼者でありにけり 城 孝子

〈寒晴やははれ舞妓の背の高き 飯島晴子〉があることがむしろ掲句により作用をしている。共に背の高いことが不似合いなのである。アンバランスに因る俳諧味であるが、この句にもやはり憐れさが感じられる。

海を見てをれば元日暮れにけり 戸栗 末廣

海の見える所に棲む望みだつた作者の現在の住居からは、須磨明石が眼下に見え、沖には淡路島が浮かぶ。一月とは

言え瀬戸内の海は穏やかである。「見てをれば」の表現の冗長さにそのことが窺える。別にへ日の暮れにちよつと覗きぬ初鏡〉があり、この所在無さは掲句と一貫したものである。

さつきまで伊吹見えぬし猫柳 大山 文字

〈さつきまで伊吹見えぬし〉の、見えなくしたものは一読して吹雪であることが解る。これは只々「猫柳」という季語の象徴力である。同じ早春の季語でそれに変るものは無い。十七文字の可能性の象徴を示した句である。

六曲の屏風の裏の寒かりし 戸田 春月

本来の屏風の用途は風除けである。しかし四曲、六曲となるにつれ見せる為のものとなる。この六曲は金屏風かも知れない。表が派手な分、裏はより寂しく、寒いものである。

臘梅を行つたり来たり喪の使ひ 田中 英子

場面設定の類句性を抜けたのは「行つたり来たり」の俗っぽい生の表現である。「喪の使ひ」の下五もそれを的確に支えている。一句の類句性は場所設定の類似に因るものではなく、表現の類似に因るものである。表現を変えれば類句性を免れる。これもまた、俳句形式の可能性のひとつである。

(以下略)

同人 I

木野本加寿江

恒星圈

加古みちよ

初日まだ届かぬ杜の御神木
初笑ひ積木崩るるまで積んで
屋上を離れて来たる寒鴉
連凧の一つが狂ひみなくなるふ
冬桜人みな同じ顔をして

金澤 明子

二〇〇五年一月五日の百合真白
駐車場より病室まで冬すみれ
寒厨に林檎くれなゐ深くあり
乾盃のワインの揺るる新年会
眠りませ永久に香りの初春の園

掛軸に竜の昇れる寝正月
福笹の鯛の目玉に押されゆく
蔵六のつつきて蓮枯れにけり
葦焼の炎は河へ雪崩れけり
屋根裏に電気屋の声寒明くる

小池 楨女

池の面に落葉片寄る風の日ぞ
庭落葉籠に集める小半日
和歌山より蜜柑の届く節分会
初曆家業の号のくつきりと
白菜を畑の帰りと下す叔父

城 孝子

糸子さんの水仙咲きぬ大旦
凧降り来青空ゆらし山ゆらし
沈丁の香りに母を諭しをり
山茶花や人待つてゐる夕べの灯
木の芽風吹く休日のひばり館

獅子座

山尾玉藻推薦

丸山照子

凧や鯨のごとき島ひとつ
おぼえあるベンツ隣へ御慶かな
初夢の跡もなかりし長睫
紀の国の菜の花にのる雀どち

西畑敦子

宝恵籠の橋から橋へとびゆけり
隕石の堅きを抱く冬帽子
遊歩道にちぢれ葉ぼたん盛りなす
寒林にリユツクの入りてそれつきり

高橋芳子

山積みの自転車渡る寒の海
舞初めの口ボットに科ありにけり
立春や五指に貼りたる絆創膏
煤払ひの途中出できし天道虫

小林成子

愛護部のジャケツ羽織れり男坂
三人の子らへ発信冬木の芽
検問の影の届きし冬菜畑
子の指紋重なる玻璃の七日かな

中上照代

破魔矢受くことも叶はず逝きし吾子
黒猫の眼と会ふ三日ポストまで
介護士の耳かきくれし松の内
賜はりし木洩れ日を手に春を待つ

加藤君子

初雪のしだいにしんと本気なり
福笑ひ見たことあるよこんな顔
長々と電話の続く小正月
おや三日何だそうかと落着きぬ

高松由利子

見に来たる牝馬寒九の息づかひ
七草の土の匂ひをよるこびぬ
鳥辺山参り見下ろす寒鴉
成田屋の寄り目睨みし恵方かな